

# 未来と芸術展：AI、ロボット、都市、生命 —人は明日どう生きるのか

2019年11月19日(火)～2020年3月29日(日) 森美術館(六本木ヒルズ森タワー53階)

## 豊かさとは何か、人間とは何か、生命とは何か 美術の領域を越えたプロジェクトや作品100点超を一挙公開！

森美術館は、2019年11月19日(火)から2020年3月29日(日)まで、「未来と芸術展：AI、ロボット、都市、生命—人は明日どう生きるのか」を開催します。

テクノロジーの発達は、いま、私たちの生活のさまざまな側面に大きな影響を与えようとしています。近い将来、人間は多くの判断をAI(人工知能)に任せるようになり、AIが人間の知能を超え、私たちの社会や生活に急激な変化をもたらす「シンギュラリティ」が到来すると言われていています。また、ブロックチェーン技術は、社会システムに新たな信用と価値を作り出し、多様なバイオ技術は、食や医学、そして環境に多大な影響を与えることになるでしょう。私たち人間が身体機能を拡張させ、いま以上に長寿を享受する時代もそう遠くない話なのかもしれません。そうした急激な変化がもたらす未来は決して明るいものだけではないかもしれませんが、私たちは、少なくとも20-30年後の未来のヴィジョンについて考えることが必要なのではないのでしょうか。それは同時に、豊かさとは何か、人間とは何か、生命とは何かという根源的な問いにもつながるのです。

本展は、「都市の新たな可能性」、「ネオ・メタボリズム建築へ」、「ライフスタイルとデザインの革新」、「身体の拡張と倫理」、「変容する社会と人間」の5つのセクションで構成し、100点を超えるプロジェクトや作品を紹介します。AI、バイオ技術、ロボット工学、AR(拡張現実)など最先端のテクノロジーとその影響を受けて生まれたアート、デザイン、建築を通して、近未来の都市、環境問題からライフスタイル、そして社会や人間のあり方をみなさんと一緒に考える展覧会です。



エコ・ロジック・スタジオ  
《H.O.R.T.U.S. XL アスタキサンチン g》  
2019年  
© NAARO

プレスリリース お問い合わせ 森美術館 広報事務局(共同ピーアール内): 津原、藤本、田ヶ谷、伊藤  
Tel: 03-3571-5258 Fax: 03-3574-0316 E-mail: mam-pr@kyodo-pr.co.jp

## 開催概要

**展覧会名:**「未来と芸術展：AI、ロボット、都市、生命—人は明日どう生きるのか」

**主催:** 森美術館、NHK

**監修:** 伊藤穰一(MIT メディアラボ所長)

**企画:** 南條史生(森美術館館長)、近藤健一(森美術館キュレーター)、徳山拓一(森美術館アソシエイト・キュレーター)、オナー・ハガー(アートサイエンス・ミュージアム館長、シンガポール)

**企画協力:** MIT メディアラボ、SymbioticA(西オーストラリア大学)、一般財団法人 森記念財団

**会期:** 2019年11月19日(火)–2020年3月29日(日)

**会場:** 森美術館(東京都港区六本木6-10-1 六本木ヒルズ森タワー53階)

**開館時間:** 10:00-22:00(火曜日のみ17:00まで)

\*ただし11/19(火)、12/31(火)、2/11(火・祝)は22:00まで \*入館は閉館時間の30分前まで \*会期中無休

**入館料:** 一般1,800円、学生(高校・大学生)1,200円、子供(4歳–中学生)600円、シニア(65歳以上)1,500円

\*表示料金に消費税込 \*本展のチケットで展望台 東京シティビューにも入館可(スカイデッキを除く)

\*スカイデッキへは別途料金がかかります

**一般のお問い合わせ:** Tel: 03-5777-8600(ハローダイヤル) 森美術館ウェブサイト [www.mori.art.museum](http://www.mori.art.museum)

最新のプレス画像は、こちらの URL より申請、ダウンロードいただけます。

<https://bit.ly/2TLpLFM>



ビャルケ・インゲルス&ヤコブ・ランゲ  
《球体》  
2018年  
撮影: Michael Filippoff

## プレスリリース

お問い合わせ 森美術館 広報事務局(共同ピーアール内): 津原、藤本、田ケ谷、伊藤  
Tel: 03-3571-5258 Fax: 03-3574-0316 E-mail: [mam-pr@kyodo-pr.co.jp](mailto:mam-pr@kyodo-pr.co.jp)

## 展覧会の特徴

### 1. これからのライフスタイルや近未来の人間像を考察するための展覧会

最先端のテクノロジーにより大きく変化し得る私たちの近未来について考察します。AIやロボット技術により、私たち人間は労働から解放され、自由を謳歌するバラ色の未来を想像することもできますが、その一方で、人間がそれらのテクノロジーに支配され、隷属する未来像を提示し警鐘を鳴らす言説も存在します。本展では、さまざまな未来像を通して、どのような未来を作るべきなのか、みなさんと一緒に考えます。

### 2. 現代美術だけじゃない！ジャンル横断型のテーマ展

森美術館では、これまでに「医学と芸術展」(2009-2010年)、「宇宙と芸術展」(2016-2017年)といった現代美術と歴史的・科学的資料を組み合わせたユニークなテーマ展を企画してきました。本展では、その領域をさらに広げ、現代美術のみならず、都市論や建築、デザインやプロダクト・イノベーション、バイオアートから映画、漫画まで、異色の展示物で構成します。

### 3. 近未来の生活をイメージしたコーナーが登場

展示室内に近未来の生活をイメージしたコーナーを設け、私たちにとって身近な衣服や家具、照明や食物など、衣食住に関する作品やプロダクトを展示します。そう遠くない未来に私たちが暮らしを共にするかもしれない、利便性を追求しつつも環境を考慮した、想像力を刺激するアイテムやシステムを一足先に体験することができます。

### 4. アートの実験室「バイオ・アトリエ」を設置！

アーティストたちはバイオ技術を使い、アートの主題や表現をさらに拡張しようとしています。彼らの作品を集めた実験室のようなアトリエが展示室内に登場し、ゴッホが自分で切り落としたとされる左耳を現代のバイオ技術で再現した作品などを展示します。

### 5. 2020年に向けて、今日的でグローバルな問題提起を行い文化交流、意見交換のプラットフォームとなる展覧会

2020年を目前に、国内外のヒト・モノの移動は加速し、私たちはより国際的な視野から日本を見つめ直す必要に迫られています。本展は、世界各地の建築家、デザイナー、アーティスト、研究者が問いかける都市のありかた、環境問題、高齢化社会やさまざまな分野で進む自動化など、今日私たちが直面する事象、そしてそれに伴う未来の課題を提示し、議論する場です。

### 6. AIとのコラボレーションにより、本展のタイトルを決定

今回森美術館は、IBMが開発したAI(人工知能)「IBM Watson」との協働により本展覧会タイトルを決定しました。AIによって生成された15,000を超える候補から選ばれたタイトルが「未来と芸術展：AI、ロボット、都市、生命——人は明日どう生きるのか」です。\*

\* 詳細については、同日付のニュースレターをご参照ください。

プレスリリース お問い合わせ 森美術館 広報事務局(共同ピーアール内): 津原、藤本、田ヶ谷、伊藤  
Tel: 03-3571-5258 Fax: 03-3574-0316 E-mail: mam-pr@kyodo-pr.co.jp

## 展覧会の構成：5つのセクション

### セクション1 都市の新たな可能性

人類が築く新たな都市は、砂漠や海上、空中へと広がりつつあります。それらの都市は、1960年代に日本の若手建築家が構想したメタボリズム\*の再来を思わせます。その多くは当時の技術では実現することができませんでしたが、今日では、情報技術やバイオ技術の発達により、環境に負荷をかけず持続可能な、真のメタボリズム都市が実現しつつあります。本セクションでは、最先端の都市計画や、アーティスト、建築家が描くユニークな都市像を写真や映像、模型などを通して紹介します。

\*メタボリズム：1960年代に黒川紀章、菊竹清訓、槇文彦、栄久庵憲司らが展開した日本独自の建築運動および理論。「新陳代謝」を意味する用語で、生命が成長、変化を繰り返すように、建築や都市も有機的にデザインされるべきであるという理念に基づく。

### セクション2 ネオ・メタボリズム建築へ

環境にやさしい有機的な建材の開発、3Dプリンター、ドローン、ロボティクスに代表される先端テクノロジーを駆使した新工法など、今日の建築の最新の動向を紹介します。それらによって実現する、自然と共生し、持続可能で可変的、柔軟に新陳代謝する建築は、新たなメタボリズム＝ネオ・メタボリズムの可能性を示唆しているかのようです。

### セクション3 ライフスタイルとデザインの革新

技術の革新は、私たちの衣食住のあり方を着実に変えています。コンピューターによるモデリングや3Dプリンターの登場はデザインの歴史を大きく刷新し、人工食材の開発は、人口増加や食料不足など地球規模の問題に対する解決方法のひとつとされています。本セクションでは、最先端のテクノロジーや斬新なコンセプトから誕生するデザインやプロダクトに着眼し、新しいライフスタイルの可能性について考察します。



ビャルケ・インゲルス・グループ  
《オーシャニクス・シティ》  
2019年



WOHA  
《オアシア・ホテル・ダウンタウン》  
2016年  
撮影：Patrick Bingham-Hall



ヴァンサン・フルニエ 《マン・マシン》 2009-2017年

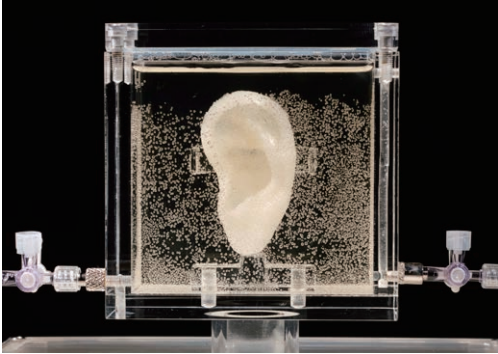


エイミー・カール  
《インターナル・コレクション》  
2016-2017年

**プレスリリース** お問い合わせ 森美術館 広報事務局(共同ピーアール内): 津原、藤本、田ヶ谷、伊藤  
Tel: 03-3571-5258 Fax: 03-3574-0316 E-mail: mam-pr@kyodo-pr.co.jp

## セクション4 身体の拡張と倫理

ロボット工学とバイオ技術の進歩は人間の能力を高め、不治の病を克服することを可能にしつつあります。それは素晴らしいことですが、一方で、私たち人間が自身の身体をどこまで拡張、変容させて良いのか、という倫理上の問いも浮上しています。本セクションでは、人間にとって最も大きな関心の対象である身体に焦点を当てます。



ディムト・シュトレーベ  
《シュガーベイブ》  
2014年-



アギ・ヘインズ  
《体温調整皮膚形成手術》(「変容」シリーズより)  
2013年

## セクション5 変容する社会と人間

テクノロジーの発達に伴う新しい価値観は、これまで当たり前とされてきた人間像や社会像を大きく覆します。例えば、人間がロボットに看取られる時代や、3人以上の親の遺伝子を継ぐ子どもを「共有」する未来が訪れるかもしれません。本展最後のセクションでは、「人間」や「生命」、「幸福」の定義の再考を促し、私たちがよりよい未来に向かうためにどうすべきかを問いかけます。



長谷川 愛 《シェアード・ベイビー》 2011年



ザカリー・カネバリ&ドレア・クーバー 《ザ・ドッグ》 2015年



手塚治虫  
《火の鳥 未来編》  
1967-1968年  
©手塚プロダクション

プレスリリース お問い合わせ 森美術館 広報事務局(共同ピーアール内): 津原、藤本、田ヶ谷、伊藤  
Tel: 03-3571-5258 Fax: 03-3574-0316 E-mail: mam-pr@kyodo-pr.co.jp

## 【同時開催】

主催：森美術館 会期：2019年11月19日(火)－2020年3月29日(日) \*「未来と芸術展」チケットで鑑賞可



MAMコレクションは、森美術館の収蔵品を、多様なテーマに沿って順次紹介する展覧会シリーズです。

### MAMコレクション011：横溝 静＋松川朋奈 －私たちが生きる、それぞれの時間

企画：徳山拓一(森美術館アソシエイト・キュレーター)

引退したイギリスの女性ピアニストたちを題材にした横溝静の映像作品《永遠に、そしてふたたび》(2003年)と、六本木を仕事や生活の場とする女性たち取材し描いた松川朋奈の絵画作品を展示します。文化も世代も異なる女性たちの姿をとおして、現代において働くこと、生活することを見つめ直します。



横溝 静 《永遠に、そしてふたたび》 2003年  
2チャンネル・ビデオ・インスタレーション 17分(ループ)  
Courtesy: WAKO WORKS OF ART, Tokyo  
展示風景：「永遠に、そしてふたたび」IZU PHOTO MUSEUM(静岡)  
2018年 撮影：木奥恵三



MAMスクリーンは、世界の多様な映像作品のなかから選りすぐりのシングル・チャンネル作品を上映するプログラムです。

### MAMスクリーン012：チェン・ジエレン(陳界仁)

企画：矢作 学(森美術館アシスタント・キュレーター)

チェン・ジエレン(陳界仁、1960年台湾生まれ)の映像作品は、廃墟化した産業施設に宿る記憶とかつての労働者の存在を手掛かりに、戒厳令時代から新自由主義時代に至る台湾の歴史の変遷を過去の記録映像を組み合わせながら再記述するものです。本プログラムでは、森美術館収蔵の作品を中心に、チェンの作品群を紹介します。



チェン・ジエレン(陳界仁) 《工場》 2003年  
スーパー16ミリのDVD変換、カラー、サイレント 31分9秒(ループ)



MAMプロジェクトは森美術館が世界各地のアーティストと実験的なプロジェクトを行うシリーズです。

### MAMプロジェクト027：タラ・マダニ

企画：椿 玲子(森美術館キュレーター)

タラ・マダニ(1981年テヘラン生まれ、ロサンゼルス在住)は、イランと米国の文化的背景を超えて、急速なグローバル化が進む現代社会を批評する風刺的でユーモラスな作風で知られています。国際的なアートシーンで活躍するマダニの、新作を含む絵画や映像作品などを発表します。



タラ・マダニ  
《プリズムの屈折によるコーナー・プロジェクションとバケツ》  
2018年 油彩、麻  
左パネル：182.9×182.9 cm、右パネル：182.9×365.8 cm(二連画)  
Courtesy: 303 Gallery, New York 撮影：Fredrik Nilsen

プレスリリース お問い合わせ 森美術館 広報事務局(共同ピーアール内)：津原、藤本、田ヶ谷、伊藤  
Tel: 03-3571-5258 Fax: 03-3574-0316 E-mail: mam-pr@kyodo-pr.co.jp